

【巻頭言】

花菖蒲の分類と審査基準

会長 椎野昌宏

日本花菖蒲協会として、花菖蒲の園芸的分類と展示会における審査基準を設定することが、花菖蒲に関する私たちの認識を明確にし、園芸文化を表現する媒体としての質を高めるため、ぜひ必要と考え、本号で発表することにしました。

既に富野耕治先生を始めとしてなされた園芸品種の分類に加え、どの系統にも属さない系統間の交配により増えつつある現代花や、花菖蒲と近縁種との交配で生まれつつある種間交配種を新たに加え、次のように分類します。

肥後系

伊勢系

江戸系

長井系

外国系

種内交配種

種間交配種

各系統の特性や、系統内の品種型については後述（P6）されていますのでご覧ください。

今後協会から発行されます花菖蒲品種リストや、新しく登録される品種も、上記の基準に基づいて分類されます。なお野生種から園芸化されたものについては、植物学上の分類との接点もあり、更に検討を重ねたいと考えます。その問題点については、本誌に掲載された田淵俊人教授の記事（P3）に明確に記述され、指摘されていますのでご覧ください。

次いで展示会における出展作品の審査基準についてですが、かねてよりその文書化が望まれてきました。今まで、鑑賞力を備えたベテランたちにより、展示期間中毎朝現場で選抜され、ひな壇に飾られてきました。然し、今後に向けて、後継の方々には文書の形で基準を示し、審査の公明性と継続性を示すことが必要となってきました。もとより伝統を守る満月会による熊本系や、松阪人士による伊勢系はそれぞれの基準により、内容と様式を展示にあらわしてきたようですが、花菖蒲が

全国的に普及し、新花が生まれてきている現在、協会の主催する展示会でも、審査基準の適用を図りたいと考えます。清水さんを中心に検討し、試案を作りましたので、現場で行う審査実務用の評価票を本誌P15に掲載しました。なお江戸系は鉢植えよりは庭園花として鑑賞し、評価される面が強いので、審査基準からははずしました。今後の検討課題です。肥後系は弁形、芯・薬片、花茎長、葉性、清潔度の5点から、伊勢系は弁形、下垂性・弁質、芯・薬片、葉性、清潔度の5点からチェックし採点します。実際のやり方は展示会実行委員会で決めてもらいますが、金屏風前に飾る5~7鉢を対象に行います。まず待機している鉢から花容をみて選抜し、展示台上に載せられたものについて個々に採点し審査票に記録します。もし一定の基準に満たないものがあれば入れ替えします。会期中に最高点を獲得した方には褒賞をさしあげることを検討することも可能です。2~3年試行し、審査基準で訂正し、追加すべき点があれば改定します。筆者が関係している、大輪朝顔のように花径を物差しで計ったり、花ギレ、筒ヨゴレ、弁ダレカケコミ(花卉周辺の不自然な凹凸)などの細密にわたる減点項目は不要ですが、花菖蒲の花容と草姿の優劣を判断する客観的な基準を設けました。

花は目で見て楽しむもので、不粹に重箱の隅をほじくり廻すようにしなくても良いのではないかという観方もあるでしょう。然し二つ以上の同種のものがある場合、人は必ずどちらが良いかと比較しがちのものです。日本花菖蒲協会の会員として、花菖蒲を専門的に栽培するには、どのようなものが専門的に見て、観賞価値が優れているかを判断できるよう習熟することが大切です。

花菖蒲という日本の伝統園芸花のクローンを後世に正しく維持発展させる基盤となり、日本や欧米における育種活動への指針ともなると確信します。